The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	迷信(superstition)とは何か? : 日本人は西洋人より迷信深いのか
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2011, 9, p. 29-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

迷信（superstition）とは何か？
―日本人は西洋人より迷信深いのか―

小倉　慶郎

【要旨】

日→英翻訳の授業で、「忌み言葉」のエッセイを取り上げた。日本では結婚式の禁句が数多くあり、「別れる」「切れる」「去る」「変える」「浅い」「壊れる」は使ってはいけない....。お馴染みのtaboo wordsである。翻訳の授業ではあるが、訳すための背景となる、日本文化における「忌み言葉」をまず解説した。すると授業中、チェコの留学生から「（このエッセイを読むと）日本人は迷信深いと思われないですか？」という質問が出た。ここで彼のいう「迷信深い」とはどのような意味なのだろうか？そもそも「迷信」とは何なのだろうか？また日本人は西洋人よりも迷信深いといえるのだろうか？この留学生からの質問を足がかりに、日本の「迷信」と英語のsuperstitionを比較・検討する。考察の結果、迷信とsuperstitionにはある決定的な違いがあることが判明した。その違いとは何か、またこの質問が出た背景を紹介し、留学生教育の一助としたい。

はじめに

2010年に、筆者が担当する日→英翻訳の授業で、はじめて「忌み言葉」のエッセイを取り上げた。朝日新聞の天声人語に掲載されたものである。筆者は、日本語から英語への翻訳の際に、教材としてできるだけ日本文化特有の事象を取り上げようと努めている。「忌み言葉」の翻訳は優秀な留学生にとってもやや難しかったようだ。だが、筆者の授業では、翻訳の技術を磨くだけでなく、日本文化についての知識、見識を深めてもらいたいという思いがあるのであえて扱うことにしたのである。

まず以下にエッセイの日本語原文を引用する。

忌みことば

きのうは鏡開きだった。正月に供えた鏡もちを下げ、しるこや雑煮に入れて食べる行事。柔道や剣道の道場では、いまでもとりおこなうが、ふつうの家での鏡開きは、だんだん珍しくなってきた▼鏡もちを包丁で「切って」はいけない。金槌（かなづち）などでたたいて小片にする。「切る」は、めでたい正月にふさわしくない。「割る」もあまり歓迎されぬ。縁起をかついで「開く」に言い換えることが多い。それで「鏡開き」となる。祝宴が「終わる」というのを忌み、「お開きにする」と表現するのも同じだ。これらを忌みことばと呼ぶ▼するめの「する」も、嫌われることがある。だから、あたりめと言い換えられる。梨（なし）は、有りの実だ。すり鉢は、あたり鉢。硯箱（すずりばこ）は、あたり箱。ひげを剃（そ）るのを、ひげをあたる、という人もいる。職業によっては、古くから縁起が悪いので使ってはいけないことばがあった。たとえば漁業に携わる人たちは、蛇を長もの、猿を山の人と称したそうだ▼結婚式の禁句は、いろいろある。別れる、切れる、去る、帰る、浅い、壊れる、など。スピーチ・あいさつ心得集のたぐいには、懇切丁寧な言い換え例が載っていて、なかなか参考になる。〈気をつけてお帰りください〉は、いけない。〈途中お気をつけになりますよ

うに〉だ。〈お見せできないのが、かえすがえすも残念です〉は〈お見せできないのが、本当に残念です〉▼鏡開きの話に戻ると、去年の暮れ、スーパーなどで人気を集めた鏡もちがあった。「小もち入り」である。鏡もちの形をしたプラスチック容器の中に、一、二個ずつ包装した小さなもちが何組か入っている仕掛けだ。これなら鏡開きの際、切ったり割ったりする必要はない。業界の主流になりそうな勢いだという▼忌みことばは、次第に減る傾向にあるそうだ。「小もち入り」がヒットと聞けば、納得できる。　1997.1.12

日本の「忌み言葉」についてのこのエッセーを読むと、無意識に「忌み言葉」を避けている自分に改めて気付かされる。「忌み言葉」が日本のさまざまな場面で見られる理由は、日本の「言霊信仰」にあるのだろう。良い言葉を出せば、良い事象として現実にあらわれ、悪い言葉を出せばそれが悪い結果となって現れる。万葉集で山上憶良が「言霊の幸はふ国」とうたった伝統が現在も根強く残っているのだ。筆者は、授業でまずこの「言霊信仰」を解説したあと、次のように話した。

1月11日に行う「鏡開き」は、本来は「鏡餅割り」のことだけれど、「割る」は忌み言葉なので「開く」を使います....。日本では特に結婚式の禁句が数多くあります。「別れる」「切れる」「去る」「変える」「浅い」「壊れる」は結婚式のスピーチでは使ってはいけないんですよ。僕は、こういうことは気にしませんが、縁起が悪いと考えて不快に感じる日本人はたくさんいます。皆さんは、こういった忌み言葉をすべて知る必要はないですが、日本文化を勉強する上では欠かせないものだと私は思っています。少なくとも結婚式の禁句くらいは覚えておきましょう。現在、日本では国際結婚が増えているので、将来必要になるかもしれませんからね（笑）。

日本の「言霊信仰」は、縁起の悪い言葉を避ける、というかたちでこのほかいろいろなところで見られますよ。皆さんが住んでいる大阪は、明治になって現在の表記になるまでは、大坂（おおさか・おおざか）と表記するのが普通でした。なぜ「坂」から「阪」に変わったのか。いろいろな説がありますが、「坂」の字は「土に反（かえ）る」とも読めて縁起が悪いから、「阪」になったという説があります。また、「鉄」という漢字は、「金」（かね）」を「失う」とも読めるので、社名に「鉄」という漢字を使わない会社があります。新日本製鐵などは有名ですね。そうそう、受験の時期になると、親が「落ちる」ということばを使わないように気を遣ったり、試験前日には「カツ」を食べて受験に「勝つ」ように配慮したりする家庭も多いんですよ。

こうした解説のあと、筆者の授業を受講するチェコからの留学生（男性）が真顔でこんな質問をしてきた。「（このエッセイを読むと）日本人は迷信深いと思われないですか？」私は即答できなかった。彼の言う「迷信深い」は、非難めいた口調で、かなり悪いことを意味しているように聞こえたからである。私は、日本の「忌み言葉」について肯定的に評価したわけでも否定的に述べたわけでもない。ただ事実を、neutralに説明したつもりだった。

考えてみると、現在の日本人は、人を非難するときに「迷信深い」とはあまり言わないようだ。普段、私たち日本人が使っている「迷信」とはそもそも何なのだろうか？彼のいう「迷信深い」とはどのような意味なのだろうか？また日本人は、キリスト教信仰を中心とする西洋人よりも迷信深いのだろうか？

本論では、キリスト教文化圏から発せられたこの質問を足がかりに、日本と西洋の「迷信」について考えてみることにする。

1．日本語の迷信

まず、最初に「迷信」の意味からアプローチしてみよう。迷信の事象は数限りなくあるので、日本と西洋の事例をいくつか挙げているだけで、論文の許容スペースを超えてしまいそうだからである。ここでは、事象の羅列を避けて、迷信という語および事象の本質的な部分にアプローチしてみたい。

『日本国語大辞典』（第2版）は、迷信を次のように定義している。

①誤って信じること。誤信。
②現代の科学的見地から見て不合理であると考えられる言伝えや対象物を信じて、時代の人心に有害になる信仰。

もちろんここで扱うのは②の意味である。『日本国語大辞典』には、「迷信」の初出文例として『文づかい』（1891）〈森鷗外〉が挙げられ、『明暗』（1916）〈夏目漱石〉の用例が続く。この用例が正しいとすれば、「迷信」は、明治時代以降に造られた比較的新しい語である。「迷信」がこの時代につくられた全くの造語か、あるいはそれ以前の日本語からの転用かは不明だが、筆者は後者の可能性が高いと考えている。「めいしん」で『日本国語大辞典』を引くと「迷信」の次に「迷津」という項目が見つかる。

迷津　（「津」は港。迷いのこの岸の意）仏語。さとりの彼岸（ひがん）に対し、衆生がさまよう三界六道の迷いの世界をいう。

「信」は「津」と一字違いながら、音は同じである。初出は『経国集』（827）だから、9世紀にまで遡る言葉である。調べてみると、現在でも「迷津慈航（めいしんじこう）」という慣用句が生きていて、普通の辞書にも載っている。『大辞泉』によれば、「仏語。悟りの彼岸へ衆生を渡す慈悲の船。仏法や仏の慈悲をたとえていう」そうだ。

迷信はもともと「正信」に対してできた言葉であろう。そうであれば、仏教の悟り≒正信に達せずに娑婆をさまよっている、という意味の「迷津」から「迷信」が派生してもおかしくはない。明治時代になって、西洋科学万能の時代が到来し、旧来の無知蒙昧な慣習が非難された。そして、廃仏毀釈を背景に、仏教を基準とするよりもむしろ西洋科学を基準として、「迷津」の一字を変えて「迷信」としたのかもしれない。

『日本国語大辞典』で森鷗外の書がこの言葉の初出とされているのは興味深い。鷗外といえば、近代西洋医学を東京帝國大学で学び、さらにはドイツに留学したエリートである。陸軍軍医として活躍し、最終的には軍医のトップ陸軍省医務局長まで登り詰めた鷗外は、科学的根拠のないことは徹底的に嫌った人間である。軍隊で脚気が流行した時も、当時の主流であった伝染病説に固執した（当時ビタミンは知られていなかった）逸話は有名である。

鷗外が「迷信」という語の生みの親とまでは断言できないが、近代科学を信奉した鷗外がこ

の語を作り出したとしても少しもおかしくはない。文献学的にこの件に決着をつけるには時間がかかりそうなので将来の機会に譲ることにするが、ここでは、昔からある仏教用語「迷津」がもとになり、近代になって「迷信」という語ができた可能性があることを指摘しておきたい。

このような宗教的な背景は、実は英語のsuperstitionにもある。私が「迷信」の仏教用語起源の可能性を指摘するのはsuperstitionとの比較においてなのである。では、次にsuperstitionについて考察してみよう。

2．英語のsuperstition

*Oxford English Dictionary*によれば、英語のsuperstitionの語源はラテン語の*superstitio*にまで遡る。*superstitio*とは文字通りには、standing over a thing in amazement or awe「驚きあるいは畏敬の念を持って、あるものの上に立つ」という意味が第一義であろうという[1)]。standing over は仮に「～の上に立つ」と訳したが、英語では「近くで見守る」という意味でもよくつかわれる。要するに「自分の通念と違う風習などに唖然とする」というのが原義だろう。

現在の西洋人一般の迷信に関する考えを端的に表している定義は、以下の*Wikipedia*[2)]のものが妥当であるように思う。

Superstition is a credulous belief or notion, not based on reason or knowledge.
迷信とは理性や知識に基づかない盲信である。

これを見ると、現代科学を基準とした日本人の「迷信」の定義と変わらないように思える。*Wikipedia*ではさらに解説が続く。

To European medieval scholars the word was applied to any beliefs outside of or in opposition to Christianity ; today it is applied to conceptions without foundation in, or in contravention of, scientific and logical knowledge.
中世のヨーロッパの学者は、迷信という語をキリスト教以外、あるいはキリスト教に対峙する信仰に用いた。今日では、科学的・論理的知識の裏付けがない、あるいはそれに反する考えに用いられる。

近代以前、キリスト教の影響の強かった中世ヨーロッパでは「異教」を信じることが迷信と呼ばれていたのである。なぜ異教が迷信なのか。これはそもそも旧約聖書中のモーセ（Moses）の十戒（The Ten Commandments）に依拠しているのだ。出エジプト記（20:2-17）には、以下のように書かれている。（Authorized Versionと新共同訳による）

Thou shalt have no other gods before me.
あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

現代のキリスト教でも、God以外の信仰はもちろんのこと、Godを正統な方法で礼拝・崇拝しないことまで「迷信」として戒めている。『岩波キリスト教辞典』の「迷信」の項目を見てみ

よう。

迷信 [英] superstition
無知で軽信に基づいた神への崇拝、あるいは神ならぬものへの不適切な信仰をさす。一般に恐れと結びつき、対象を過度または恣意的に信じ、倫理的な不安定さや非合理な判断をともなう。迷信には、組織化された表現方法を欠いたままの場合もあるが、しばしば魔術的な祭祀とも結びついている。偶像崇拝や占い、また無益な儀礼遵守など、一般に神にふさわしくない仕方で礼拝することは迷信となる。(以下略)

ところで皆さんは、カテキズム (Catechism) をご存じだろうか？カテキズムとは、「教理問答書」ともいわれ、キリスト教を学び、信仰者となるための必須知識が詰まった公式の教理教育書である。特にローマカトリックの『カトリック教会のカテキズム』(*Catechism of the Catholic Church*) が有名である。バチカンのウェブ・サイトでは、規範となるラテン語を含む10か国語でテキストが提供されている。
迷信を「罪深い」ものと考えているカトリックは、迷信により教義から逸脱しないよう戒めている。まずその箇所の英語版を見てみよう。

III. "You Shall Have No Other Gods Before Me"

2110 The first commandment forbids honoring gods other than the one Lord who has revealed himself to his people. It proscribes superstition and irreligion. Superstition in some sense represents a perverse excess of religion; irreligion is the vice contrary by defect to the virtue of religion.

Superstition

2111 Superstition is the deviation of religious feeling and of the practices this feeling imposes. It can even affect the worship we offer the true God, e.g., when one attributes an importance in some way magical to certain practices otherwise lawful or necessary. To attribute the efficacy of prayers or of sacramental signs to their mere external performance, apart from the interior dispositions that they demand, is to fall into superstition.

次に、日本語版『カトリック教会のカテキズム』(カトリック中央協議会) から上記にあたる箇所を引用する。

3.「わたしのほかに神があってはならない」
2110　第一のおきては、ご自身の民に自らを啓示された唯一の主以外の神々を拝むことを禁じるものです。迷信と神への不敬を禁じています。迷信とは、宗教の一種の行き過ぎであり、

ゆがみです。神への不敬とは、敬神徳の欠如であり、敬神徳とは反対の悪徳です。

迷信

2111　迷信とは、宗教心ならびにその宗教心の実践から逸脱することです。それは真の神にささげる礼拝におよぶことさえあります。たとえば、ある種の正当であったり必要であったりする信心業に、何か魔術的な効果を帰すような場合です。必要な心構えにではなく、祈りのことばや秘跡のしるしなどの単なる外面的な要素に効力があると考えることは迷信です。

このようにキリスト教以外の神を拝むことだけでなく、キリスト教の神でも「正統な方法」で礼拝しないと「迷信」ということになるのである。

ここで日本人が使う「迷信」と英語のsuperstitionの意味を整理・比較してみよう。

表 1

	迷信	superstition
1．現代科学・理性に反する	○	○
2．異教を信じる	×	○
3．正統な礼拝の仕方をしない	×	○

日本語の「迷信」と英語のsuperstitionの間で重なる意味は1のみであり、2・3は、中世以来のキリスト教的解釈である。本稿の初めに登場した学生はチェコの出身であり、現在、この国では国民の40%はカトリックであるという。したがって「日本人は迷信深いと思われないですか？」という質問は、このカトリックの見方を含んでいる可能性が高い。「迷信深い」＝「罪深い」というキリスト教徒としての非難を多少なりとも含んでいると推察できるのである。

さてこのようなキリスト教的立場から見ると、日本の忌み言葉や宗教的な習俗はすべて「迷信深い」ということになりそうだ。実際、*Wikipedia*でJapanese superstitionsという項目を見てみると、Superstitious beliefs are common in Japan.（迷信的な考えは、日本ではよく見られる）とある。commonはhappening often ; existing in large numbers or in many places（*Oxford Advanced Learner's Dictionary*）という意味であるから、少なくとも一般の英語国よりも日本では迷信が多いというニュアンスなのである。

3．迷信を相対的に見る

前節の考察をもとにすると、キリスト教文化圏から見たら日本人は「迷信深い」というレッテルを張られてしまいそうで旗色が悪い。しかし「迷信」には、こうしたキリスト教国からの一方的な見方だけではなく、非キリスト教国からの見方もあることを本節では提示したい。

私は、本務校が大阪府立大学であるから、週1回本センターで外国人留学生を教える傍ら、本務校では日本人学生に一般英語を教えている。その際、留学生に教えるのとまったく同じように、日本人学生にも言葉のもつ文化的背景を教えることがある。偶然といえば偶然だが、「忌み言葉」の授業を本センターで行ったのと同じ週に、日本人学生に英単語の持つ文化的背景

（キリスト教起源の背景）を教えることになった。月曜日のセンターの授業では、一人のチェコの留学生から、非難の口調の質問が飛んだだけであったが、翌日火曜日の大阪府立大学の授業では、教室の空気が文字通り“凍りついた”。その時の状況を話してみたい。

この日、英語の授業で使用するテキストの中に、goshという日本人には耳慣れない語が出てきた。そこで、以下のような板書をして説明した。

Gosh, it's hot in here.
Oh, my goodness!
Gee, I don't know.

ここで、使われているgosh, goodness, geeという言葉は、ある宗教的な言葉を避けるために使われているのです。旧約聖書では、モーセの十戒の3番目に「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない」（Thou shall not take the name of the Lord thy God in vain.）という条項があります。ですから、キリスト教の信仰があるきちんとした英米人は、人前でOh, my God! なんて叫んではいけないんですよ。日本人は信仰がないから平気ですけど。僕は昔、敬虔なクリスチャンの前でOh, my God!と叫んで叱られたことがあります。Godとは言ってはいけないから、別の言葉を使う。会話ではGodの代わりにgosh, goodnessと言ったり、Jesusの代わりにgeeと言ったりするのが普通なんです。これを英語では、euphemism（婉曲語法）といいます。

それまでいい雰囲気で順調に進んでいた授業だったが、この解説を聞いたとたん、クラスの日本人学生の間に白けた空気が流れはじめた。みんな嫌な顔をしている。もしも、学生がその時の気持ちを口にできたらこういったかもしれない。「なんと英米人は迷信深いのか！」非キリスト教圏の日本の大学生から見ると、キリスト教国の慣習は極めて奇異に映ったのである。

この現象をどのように説明したらいいのだろうか？実は、この２日間の間に起きた体験を明快に解き明かす説明が*Wikipedia*のsuperstitionの項目にあった。

In keeping with the Latin etymology of the word, religious believers have often seen other religions as superstition. Likewise, atheists and agnostics may regard any religious belief as superstition.
「迷信」のラテン語の語源とも一致するのだが、ある宗教を信じている人は、他の宗教を迷信とみなすことが多い。同様に、無神論者、不可知論者は宗教ならどれも迷信と考えるかもしれない。

これは*Wikipedia*にだけに記された特殊な意見ではない。*Encyclopedia Britannica*では、この事情をさらに詳細に、多彩な例を挙げて説明している。

Often one person's religion is another one's superstition : Constantine called paganism superstition; Tacitus called Christianity a pernicious superstition; Roman Catholic veneration of relics, images, and the saints is dismissed as superstitious to many

Protestants; Christians regard many Hindu practices as superstitious; and adherents of all "higher" religions may consider the Australian Aborigine's relation to his totem superstitious. Finally, all religious beliefs and practices may seem superstitious to the person without religion.

ある人の宗教が、別の人から見ると迷信であることはよくあることだ。（ローマ皇帝として最初にキリスト教徒となった）コンスタンティヌス一世は異教を迷信と呼んだが、ローマの歴史家タキトゥスはキリスト教を極めて有害な迷信と呼んだ。カトリックでは、聖遺物、聖像、聖人を崇拝するが、多くのプロテスタントにとって、これは迷信深い行為にすぎない。キリスト教徒は、ヒンドゥー教の習慣の多くを迷信と考え、すべての「高等」宗教の信奉者は、オーストラリアのアボリジニがもつトーテム（特定の動物・植物）信仰を迷信と考えるだろう。結局、すべての宗教の信仰・習慣は、無宗教の人からみれば、迷信深く見えるかもしれないのである。

いよいよ考察が終わりに近づいたようだ。ここで、いままで得られた知見をもとに、本稿の冒頭で問いかけた「日本人は西洋人より迷信深いのか」という疑問に答えてみよう。「キリスト教信仰のある西洋人から見たら日本人は迷信深く見えるかもしれない。しかし、視点を変えて日本人から一神教国の宗教的習慣を見たら、やはり迷信だらけに見えるだろう。つまりどこを基準にするかによって見え方が違うのだ。日本人も西洋人も相反する文化圏から見たら、十分に迷信深いのである。相対的な世界観を採用すれば、ある意味、世界は迷信だらけなのだ。」

終わりに

『授業研究』第5号では、筆者は「「神様」の英訳から見た、現代日本人の宗教観」と題して、留学生に「共通基盤から日本事象を説明する試み」を紹介した。日本独自の事象と思っていても、実は西洋にも相対物があることが多い。理解困難な日本文化の事象を説明するときには、相手の文化圏のequivalentも説明すると、外国人にとって理解しやすいのである。

そうはいっても日本の「忌み言葉」や「迷信」の説明は、いまだ試行錯誤の状態にある。これらをすっきりと理解してもらうには、英語圏の「忌み言葉」と「迷信」も説明して、双方の文化圏に「共通基盤」があることをわかってもらうのがよいはずである。「忌み言葉」に関しては、西洋では、数字の13が不吉な数字として嫌われるが、実は根拠がないこと。またKIAという略語は、アメリカではkilled in action（戦闘中死亡）を連想させるとして避ける傾向があることなどを説明した。が、すぐに思いついた英語の忌み言葉はこのくらいである。例として十分ではない。しかしキリスト教信仰にもとづく忌み言葉を「迷信」として挙げるのは、いまのところ躊躇している。敬虔な信仰者の心を傷つける可能性があるからだ。

「迷信」に関しては、Halloweenの起源はキリスト教以前のケルト人の祝祭にある[3)]という例を提示したが、結構好評だった。授業で説明したところ、ほぼクラス全員に納得してもらえた。キリスト教文化圏でも異教の祭りを無意識に行っているという事実は、宗教的偏見を崩すのには有効であろう。しかしHalloweenに続き、Bless you！の習慣を説明したときには怪訝な顔がちらほら見られた。英語文化圏では、くしゃみをした相手にBless you!という習慣がある。これはくしゃみをすると「魂が抜け出る」というキリスト教以前の信仰から出ているとよく説明

される。「魂が抜け出、悪霊が体の中に入る」から（May God）bless you!というのだと。私は辞典等で見かけるこの説明を鵜呑みにしていた。これに対し、授業では、アメリカ人学生から反論を受けた。彼は、この習慣の起源は、14世紀にヨーロッパで黒死病（ペスト）が流行した時に遡る、と主張したのである[4]。調べてみるとたしかにアメリカの文献では、この説も有力なのである。最終的にその後の文献調査でわかったことは、この習慣の起源・理由は不明だ、ということである。諸説が唱えられてはいるが、どれも信憑性に欠ける。西暦77年にはこの習慣があった、という以外には実は有力な証拠はない[5]。

まだまだ筆者の試行錯誤は続きそうである。留学生に説得力のある説明ができるようになるためには、宗教、文化、迷信についてさらに勉強しなくてはと猛省する今日この頃である。

注

1）正確には、以下のように記載されている。

The etymological meaning of Latin *superstitio* is perhaps 'standing over a thing in amazement or awe'. Other interpretations of the literal meaning have been proposed, e.g. 'excess in devotion, overscrupulousness or over-ceremoniousness in religion' and 'the survival of old religious habits in the midst of a new order of things'; but such ideas are foreign to ancient Roman thought.

Oxford English Dictionary Second Edition

2）英国の科学専門誌Nature（2005年12月15日号）は、Special Report : Internet encyclopaedias go head to headと題して、*Wikipedia*は情報の正確さにおいて、権威ある*Encyclopedia Britannica*と変わらない、と報じた。ただし、これはscienceの項目の比較であり、英語で書かれた記事のみを指していることを補足しておく。日本語の*Wikipedia*の記事は、筆者が見るところでは、英語の記事よりもかなり信頼度が落ちる。統計にもよるが、non-nativeを含めると現在世界の英語使用人口は20億人はいると見られること、つまり日本とは比較にならない多人数、多文化、多国籍の人々が関わって編集・チェックを行っていることが、英語記事の正確性に貢献していると考えられる。本稿で、原則として英語版の*Wikipedia*から引用するのはこのためである。

3）*A Dictionary of English Folklore*（Oxford University Press）では、Halloweenを以下のように説明している（傍線筆者）。

Halloween (31 October). The eve of a major Catholic festival, All Saints (1 November), assigned to this date in the 8th century ; next comes All Souls (2 November), instituted c.1000 AD as a day to pray for the dead. In England since the 19th century, and increasingly in the 20th century, it has acquired a reputation as a night on which ghosts, witches, and fairies are especially active. Why this should be is debatable.

<u>Currently, it is widely supposed that it originated as a pagan Celtic festival of the dead, related to the Irish and Scottish Samhain (1 November) marking the onset of winter, a theory popularized by Frazer.</u> Certainly Samhain was a time for festive gatherings, and medieval Irish texts and later Irish, Welsh, and Scottish folklore use it as a setting for supernatural encounters, but there is no evidence that it was connected with the dead in pre-Christian times, or that pagan religious ceremonies were held (Hutton, 1996 : 360-70).

4）*Wikipedia*のResponse to sneezingという見出しでは、以下のような説明がある。

Some say it came into use during the black death pandemics of the 14th century. Blessing the individual after showing such a symptom was thought to prevent possible impending death due to the lethal disease.

5）ローマの博物学者プリニウスが記した『博物誌』では、カエサルが、くしゃみをした人に言葉をかける理由をよく尋ねたという。またローマの哲学者アプレイウスは『黄金のろば』の中で、くしゃみに対して bless you!と投げかける当時の風俗を記している。それぞれ西暦77年、150年成立の著書からの引用である。以下、*A Dictionary of Superstitions*（Oxford University Press）より。

SNEEZING : 'bless you'.

AD 77 PLINY *Natural History* XXVIII v (1856, V 283) Why is it that we salute a person when he sneezes, an observation which Tiberius Caesar, they say, the most unsociable of men, as we all know, used to exact, when riding in his chariot even?

C. AD 150 APULEIUS *Golden Ass* (tr. Graves, XIII). 'Bless you, my dear!' he said, and 'bless you, bless you!' at the second and third sneeze.

（おぐら　よしろう　大阪府立大学教授、本センター非常勤講師）